

伏見康治先生の白寿を記念して（上）

小川 泰

（形の科学会・元会長）

伏見康治先生の白寿を祝う会（2007年6月3日神田学士会館）に参加させていただいた機会に伏見先生についてかなり詳しく書きます。会は各界から200人を越える参加者で大盛会。故満枝夫人ともども嗜まれた折り紙の関係者も多く、オリガミストの川崎敏和氏（阿南高専）がステージで代表作を折る実演も。誕生から高校時代までを70ページに綴った『生い立ちの記』が配られた他、川崎氏の「カワサキローズ」も女性参加者優先で。

今回の（上）では、先生ご自身の表現を尊重しながら各種資料にもある客観的なデータを基とし、次号掲載予定の（下）では、ほぼ通読した先生の著書「確率論および統計論」で私自身の身に付き、いつでも話せるようになっている事柄や、94年と99年の形とシンメトリー国際会議に関係する話題で、もっと主観的に書きます。



写真は白寿を祝う会で挨拶された伏見先生（菅沼純一氏撮影）

§ 1. はじめに、自筆年譜と著書目録

著作集第1巻に1973年までの著者自筆の略年譜がある。その記述がかなり自伝的要素を含んでいて魅力的。そのまま掲載して、73年以後の部分だけをちょっと私が補うことにして。次節以降で、研究内容の広がり、学術会議や原子力との関わり、参議院選出馬のいきさつ等について私なりの脈絡をつけています。先生の作品ギャラリーも。次回掲載の後半は私が55年ほどにわたって受けた影響を主観的に綴ります。

伏見康治先生年譜（年号の省略等、スタイルは簡略化しております）

明42年(1909)	6月29日 名古屋市に出張中の父万治郎の次男として生れる。当時父は三井物産社員。
大2(1903)（満3~4歳）	伯母繁東の嫁ぎ先、川村松三家（銀行員）に養子となり、東京の麻布飯倉に住む。近くに、狸穴の東京帝大の天文台、芝公園、久松邸、セントアンドリュー教会などあって、遊び場所として出入りした。しかし家そのものは北向きの崖の下にあって、不健康であった。
大5(1916)（6~7）	麻中小学故に入学。「お母さん」と呼ばれるボスとして、もう少し男性的なボスといつも争っていた。毎冬風邪を引いて、精勤賞をもらえなかつた。
大8(1919)（9~10）	近所の人にすすめられて、大塚の高等師範学校付属小学校二部（男女共学組）に編入試験を受けて、転学。飯倉から大塚まで市電で一時間以上かかるところを通り。担任の三井善五郎先生が理科専門で、特に理科教室の設備が整っているところでの、デモンストレーションが印象深く、理科に進むことをきめる。絵心があって、三井先生の講壇実験をことごとく写実的に描いた。
大10(1921)（11~12）	養母繁丹毒で死亡、非常なショックを受ける。
大11(1922)（12~13）	新制度として発足した七年制高等学校の一つである東京武蔵高等学校尋常科に入学。しかし一週もたたないうちに、教室で高熱を発して、辛うじて帰宅、人事不省となる。慢性乾性肋膜炎。一年間房州保田に療養生活を送らされる。このとき、愛の巣を営んでいた石原純博士の姿をたびたび見かけた。
大12(1923)（13~14）	房州から帰ると、後妻に赤ン坊ができているために、不安定な精神状態に陥り、

	家出して横浜までさまよって行ったが、警察に保護されて帰される。川村家から実家伏見家（芝二本榎、父は独立してベニヤ製造業をやっていた）にもどる。一年休学ののち東高に復学。このときには校舎は幡ヶ谷に移っている。九月震災で、父の事業場消失。
昭2(1927) (17~18)	東京高等学校高等科に進む。理科乙類。しかし別に医者になるつもりでなく、ドイツが学問的に一番進んでいるように思ったからである（しかし大学にはいってから、文化がどんどんアメリカに移動しつつあることを知ってもっと英語をマスターしておけばよかつたと後悔した）。数学の黒須康之介先生にかわいがられて、数学に特に興味をもった（尋常科時代には鈴木豊先生にかわいがられて、生物学に親しんでいた）。他に、力学の山内恭彦先生、化学の菅原健先生から影響を受けた。
昭5(1930) (20~21)	東京帝国大学理学部物理学科に入学。願書を出すまぎわまで、数学にするか物理にするかの間で考えがきまちなかつた。先輩に故天野清氏、一緒にはいつたのは、渡辺慧氏。
昭8(1933) (23~24)	同上卒業。同級生の主だった人を記しておくと、永宮健夫、皆川理、杉本朝雄、鳩山道夫、若林良一、…。
	卒業後一年間、助手に任用、寺沢寛一先生の助手であったが、先生の学問的な弟子にはならなかつた。もっぱら、寺沢寛一先生が工学部に作られた力学教室の三羽鳥とよばれる山内恭彦、小谷正雄、犬井鉄郎三先輩に親しんだ。確率論に興味をもち、寺田物理学からはいつた後輩の高橋浩一郎氏と一緒に、振動体に加わる不規則な擾乱の影響を研究。
昭9(1934) (24~25)	新設の大坂帝国大学理学部に転職。助手の月給が七十円から六十五円にさがり、物理教室主任八木秀次氏に文句をいいにいたら、秋から講師にしてくれて、年俸千円。流体力学の友近晋教授の指揮下にはいるはずであったが、先生が海外留学中は、電解室理論の岡小天氏と一緒に仕事をし、やがて、原子核実験の菊池正士教授の指揮下にはいる。
以後5年間	菊池研究室で、コックロフト型高電圧発生装置による中性子の実験に参加し、菊池、青木寛夫（のちに熊谷姓）、伏見の三名連記の論文を多く出す。しかし一方実験と無関係な理論的研究をいくつかする。
	またこの間、同僚の湯川秀樹助教授が坂田昌一氏や小林稔氏の協力の下に、中間子説を生み出すのを、間近に見た。
昭15(1940) (30~31)	博士号をとり、教授になる。実験から離れ、理論、主として統計力学に専念し、かたわら、内山助教授とともに素粒子論に興味をもつた。
	しかしやがて第二次世界大戦が始まり、学問が手につかなくなる。科学報国運動が起り、菊池教授が海軍技師になったのはショックであった。戦争中、ほとんどの一人で教室の留寸をすることが多かつた。
昭20(1945) (35~36)	敗戦後の混乱の中で、学問の法燈を守ることが大切と考え、たくさんの研究生を抱えて、統計力学の基礎に関する研究を行なつた。
昭24(1949) (39~40)	新設の日本学術会議第一期の会員となる。以後、第三期の昭和三十二年末まで、学術会議会員として働く。
昭27(1952) (42~43)	茅誠司氏と共に、原子力研究を開始すべきだと学術会議で唱えて物議をかもす。
昭32(1957) (47~48)	この頃から五年間にわたって、関西研究用原子炉の敷地をめぐって、反対運動の総攻撃の中に悪戦苦闘する。
昭34(1959) (49~50)	大阪大学理学部長になる。

昭36(1961) (51~52) 名古屋大学にプラズマ研究所が設立され、その所長となる。これは核融合エネルギーを利用するための基礎研究をするところである。

昭47(1972) (62~63) 以降、日本学術会議第九期および第十期の副会長となる。

昭48(1973) (63~64) 定年退職、同年末紫綬褒章を受ける。

昭52(1977) (67~68) ~昭57(1982) 日本学術会議会長 この間、昭55(1980)に藤原賞

昭58(1983) (68~69) ~平成1(1989) 参議院議員 その年、勲二等旭日重光章
(この間、形の学際研究は大いにお世話になりました)

平19(2007) (98~99) 6月29日白寿。先立つ6月3日に神田学士会館で「伏見康治先生白寿を祝う会」開催

伏見康治著作集第一巻69~72ページにある著者略年譜（自筆）に、昭和52年以後の分は筆者が加筆しました。

伏見康治先生著書一覧

- 1 『驢馬電子 一原子核物理学二十話一』(創元社、のち中央公論社、1942)
- 2 『確率論及統計論』(河出書房、1942)
- 3 『量子統計力学』(編著、共立出版、1943)
- 4 『現代物理学を学ぶための古典力学』(岩波書店、1964)
- 5 『折り紙の幾何学』(伏見満枝と共に著、日本評論社、1979)
- 6 『美の幾何学』(安野光雅、中村義作と共に著、中央公論社、1979)
- 7 『時代の証言:原子科学者の昭和史』(同文書院、1989)
- 8 『伏見康治著作集』(全8巻; みすず書房、1986~1988)
 1. 学者の手すき: 2. 数理のつみ草: 3. 数学と物理学: 4. ろば電子:
 5. 原子の世界: 6. 科学者と世界: 7. 原子力と社会: 8. 私の研究遍歴
- 9 『アラジンの灯は消えたか? 伏見語録(二四三五六)』(日本評論社、1996)
- 10 『波うつ電子(仮題)』(丸善より近刊) 参考文献と付録の間を参照してください。

その他、ガモフのトムキンス・シリーズ等の翻訳や共著、編著、部分執筆が沢山あります。

§ 2. 研究者の側面

少し整理してみる。まず、研究者の側面に注目し、物理学者としてのテーマの広がりをみよう。原子核（実験を含む）、統計力学、プラズマ物理学と多岐に及んでいる。数学がからむ領域では、寺田物理学的な発想の確率論・統計論的基礎付けを意図した著書（上記一覧の2）がある。また、対称性への興味も、結晶の存在を前提とした通常の結晶学の理論展開に対して、紋様づくりの効率化といった視点で魅力ある新展開の試みは、「紋様の科学」と題する数学セミナー誌2年間の連載[1]となった。その中に、周期性と両立しえない5回対称模様の試みがあり、正5角形ができるだけ密に詰めた場合にできる隙間の種類が3種類だけだと突き止めた回があり、言い換えると隙間に相当する3種類の要素をえた4種類のタイルによる平面充填を世界に先駆けて示唆したが、別の視点から出発したほぼ同等なロジャー・ペンローズのタイル張りまで到達しなかったことは惜しまれる[2]。安野光雅、中村義作両氏を加えた名鼎談『美の幾何学: 天のたくらみ、人のたくみ』にもこれらに関わる話題が登場する[3]。また、エッシャーを日本の科学者に最初に伝えたのも伏見先生だったと思う[3]。このような新しい方向への幾何学の展開は、相前後する「折り紙の幾何学」(満枝夫人との共著)も含めて、新しいタイプの学際研究、学問の新展開として、形の科学会、形の文化会に引き継がれている研究姿勢である。2005年11月、本会編の「形の科学百科事典」[4]が受賞した毎日出版文化賞の式典、パーティーにも参加してくださいました。

§ 3. 科学と社会: 日本学術会議と原子力

次に、科学と社会のつながりの問題に目を向けると。日本学術会議との密接な関わり、そして、原子力研究への関与がある。この問題については、前記著書目録の7の特に207～259ページが貴重な文献[5]であり、PDFファイル <http://www.viva-ars.com/bunko/fushimi/hushimi-1.pdf> をwebで見ることができる。以下に要点だけを記すが、このあたりは相当程度この資料の要約である。(ちなみに、筆者は1945年8月15日には小三相当、1952年10月の茅・伏見提案時で高一である。破壊活動防止法案には関心を持っていたが、原子力については広島・長崎の惨状を具体的に知りはじめた頃)

1945年11月、占領軍は阪大理学部の1台、理化学研究所の2台、京大の未完成品のサイクロイドを持ち去って、破壊した。原子力研究は禁止、基礎物理学としての原子核物理学も制限した。このことがアメリカの科学界に伝わると、無知な兵隊による文化破壊として、サイクロトロンの発明者ローレンスが来日して日本の原子核研究の実体を視察。適切な指導をGHQに勧告した結果、阪大に予算がついた。

文部省の世話をできた学術体制刷新委員会は、アメリカの4組織（連邦科学アカデミー、工学アカデミー、医療評議会、連邦研究会議）連合体のような機能を持つ体制として、政府から完全に独立した学者の集まりで、政府に対して学術上の建言を行う日本学術会議を構想した。7部（文、法、経、理、工、農、医）各30の計210名の会員を各部毎にしかるべき資格の学者による選挙で選ぶ。伏見先生は「この7部が当時の東京大学の学部にそれぞれ対応しているのは、いささか奇妙」とコメントされている。日本学術会議は、第1条に「内閣総理大臣の所轄で、経費は国庫負担」。第2条に「我が国の科学者の内外に対する代表機関として」…とある。ここで次の注意が必要と伏見先生の指摘。「およそ国の機関で、国費で賄わないものがあるだろうか？　国の、他の機関の設置法に、こういう条項のあるものがあるだろうか？」これは日本学術会議が実は国の機関ではなく、政府から独立したものであるとの実際上の保証なのである。日本学術会議の運営上の事務を担当する事務局があるが、この部分は政府の一部なのである。科学者の会員が色々な会合を催すのに、必要な経費も国が負担する。しかし会員の集合体である日本学術会議の本体は政府と全く独立して物を言うことができる。時にはその時点での政府の政策に対して真っ向から反対をする意見を出してよいわけである。そして実際吉田茂首相は、南原繁東大総長を「曲学阿世の徒」と叱りとばしたのと同じ姿勢で、とかく占領行政に文句をつける日本学術会議を非難し潰そうとしたのであった。

1949年選挙で第1期の会員に選出された伏見先生は、「出てよかったです」ということとして専門分野の違う偉い学者の近づきになれたことの例として、羽仁五郎と山田勝次郎両氏を挙げておられる。二人とも最左翼で演説がうまく、滔々と何時間にもわたってきかされる。学術会議と政府との交渉役に会員から選出されても政府側は発令せず、委員欠席のまま協議会が開かれたらしい。2年目になっても頑張っている羽仁氏に「そろそろ現実に妥協なさったらいかがでしょうか」と進言したら、頭ごなしに「そんな弱気でどうする。あくまで頑張るべきだ」と怒鳴られたとある。

1950年朝鮮戦争、51年秋にサンフランシスコ講和条約の成立、その発効は52年と数えて、占領下の原子力研究禁止令が続くことを心配された伏見先生は、役人や政治家と接触が多い茅誠司氏に探ってもらったが杞憂であった。条約発効を期して原子力研究の準備を始めようという考え方で、副会長になっていた茅氏を口説いて第4部（理学）の議論を経て、7月下旬、各部から4名ずつ出て全体会議の進行を決める運営審議会で審議してもらった（いわゆる茅・伏見提案）。

多くの会員が的確に反応できるはずではなく、具体イメージがわくような資料を夏休み中に用意する宿題となった。その調査活動のさなか、それが若い物理学者の間に知れ渡り、9月6日～25日、東京、神戸、大阪各地でつるし上げにあった。

伏見先生は原子力研究に対するこうした意見で問題とされている部分を整理して、「原子力問題調査委員会設置について、諸君のご意見をいただきたい」という手紙を方々に配った。

問題とされた点は

(一) 政治経済上から、

- (イ) 外国からの援助が得られないどころか、妨害されるかも知れない。
- (ロ) もし資材を輸入する場合には、その輸入先からの支配権力が及ぶかも知れない。
- (ハ) 核エネルギーの平和的利用の意図が、原子爆弾製造の方向にそらされるかも知れない。
- (ニ) 日本における研究および資材が外国に利用される恐れがある。
- (ホ) 外国、特にアジア諸国に対して、悪い印象を与えるかも知れない。
- (ヘ) 日本の経済力が数百億円及至数千億円の負担にたえうるかどうか、この資金の放出が日本の経済状態に悪影響を与えるはしないか。

(二) 物理学または広く科学全般に対して、

- (イ) この応用科学に豊富な研究費が注入された場合、研究費の面から、他の純粋科学を圧迫する恐れがある。現在または将来の純粋科学研究費の枠外で、資金が出たとしても、精神的に純粋科学を圧迫するかも知れない。
- (ロ) この企画の遂行の仕方によっては、物理学界の混乱をひき起こす恐れがある。今までの物理学界の状態から考えれば、この企画を通して理懇的な研究体制を樹立することはむずかしい。

(三) 実現性からいって

- (イ) 資源が入手できないのではないか。
- (ロ) 日本の技術の低水準で、要求されるような資材（例えば高純度グラファイト）ができるかどうか。
- (ハ) 日本の核物理学者、技術者の能力が果して十分であろうか。

(四) 原子力発電が外国ですっかり企業化されてから、輸入すれば充分であって、日本でやる必要はない。

以上の問題点に対する伏見私案

- (一) 政治上の問題点については、今後の国際情勢の見透しがはっきりしない以上、確定したことはいえないが、大国が乗り気で援助してくれるということはないであろう。よくて積極的妨害がない程度であろう。アジア諸国とはむしろ連けいすべきものと思う。
- (二) ヨーロッパの小国でも実験用の原子炉の程度のものであれば建設中のものが相当ある現状からみて、少なくも実験用原子炉の段階では、特に外国に悪印象を与えることはなく、また日本で得られた研究結果や資材が外国に特に利用されるという心配はなく、また日本で得られた研究成果や資材が外国に特に利用されるという心配はすくない。
- (三) 兵器への転換の危険は、実験用原子炉の段階ではあり得ないし、工業用原子炉の運転は恐らく一〇年後のことであるから、今から問題とはなるまいと思う。しかしこの危険を避ける手段としては、この仮称原子力委員会を規制する憲章として、
 - (イ) 軍事目的の研究は一切行わない（具体的には、分離性物質の含有量が高いものは製造しない）。
 - (ロ) 研究結果はすべて定期的に公表する、を謳い、研究者一般の厳重な監視ができる組織を作ることなどが考えられる。
- (四) 実験用原子炉には五〇億円程度以下の資金があれば十分で、これを五年間ぐらいにのばせば、国民経済にとって特に過重であるとはいえないであろう。工業用原子炉発電所の建設費用は、水力大ダムの建設費とそう大きな懸隔はありそうもない。
- (五) これによって純粋研究費の面で圧迫しないことは、この企画の条件となろう。しかし研究費の多い方面に研究者が移ることは自然の勢いであるが、これが悪い影響であるとはいえない。一般に既成の研究組織を改善することは色々な条件がからみ合うのでむずかしいが、新しい組織で理想を実現することは比較的やさしいではあるまいか。
- (六) リ資源の問題は一番重要である。国内資源は全く悲観的であるが、実験用原子炉のため数トンはあるいは生産できるかも知れない。工業化時代の資源としては、さし当っての情報からいえば、インドからの輸入が考えられる。

(七) 日本の技術水準が低いことは事実であるが、この種の国家事業を通してそれが大きな刺戟を受ける利益を考えた。

1952年10月末の第13回総会になり、第四部会が審理未了で降りてしまったので、「伏見を見殺しにしては可愛そう」と思われたのであろう、と伏見先生は記している。茅・伏見の二名連名で総会に提案ということになったが、総会では四面楚歌。広島での被爆者である三村剛昂教授の声涙下る大演説で提案はつぶれた。そういうするうち、1953年暮れの国連総会でアイゼンハウバー米大統領演説で「原子を平和へ」のスローガンが生まれ、1954年3月、突如「原子炉建築予算2億3500万円」が中曾根康弘代議士から提出された。「学術会議が何も動こうとしないから、科学者の横々面を札束でなぐってやったのだ」といった由である。(もっとも当人は否定しているが)、金額はウラン235から採ったというバカ話も。寝付かれない伏見先生は、何を考えているかわからない政治家の暴走にタガをはめるべく「原子力憲章草案」を起草された。

原子力憲章 伏見案

日本国民は、原子爆弾によって多くの同胞を失った唯一無二の国民として、世界諸国民と共にこの慘虐な兵器が再び使われることなく、科学の成果が人類の福祉と文化の向上のために開発利用されることを強く祈念する。日本国民は、原子力が将来の国民生活の重要な基盤のひとつとなることを期待し、自ら原子力研究開発利用に進む高邁な意図をもっている。この意図を実現するために、その事業の大綱を日本国憲法の精神にのっとり以下の条項によって規定する。

- 第一条 原子力の平和利用を目的とし、原子兵器についての研究開発利用は一切行わない
- 第二条 原子力の研究開発利用の情報は完全に公開され、国民は常に十分の情報に接しなければならない
- 第三条 諸外国の原子力に関する秘密情報を入手利用してはならない
- 第四条 原子力研究開発利用の施設に参与する人員の選択に当たっては、その研究技術能力以外の基準によってはならない
- 第五条 同施設に外国人の投資を許さない
- 第六条 原子力の研究開発利用に必要な物資機械の輸入には通常の商行為の方途以外の道を使ってはならない
- 第七条 分裂性物資の国内搬入、国外搬出については、国会の承認を必要とする

附

政府はこの憲章の精神にのっとり、原子力法案を作製し、原子力委員会を設けて原子力事業の統括奨励にあたらしめなければならない。原子力法案の作製、原子力委員会の設置については、原子力がいまだ研究の端緒にあるにすぎない事情を考慮し、日本学術会議に諮問して科学者の意向を強く反映しなければならない。

この原子力憲章伏見案が種となって、いわゆる「原子力三原則=民主、自主、公開の三原則」が学術会議で認められ、それが政治家側に反映して、翌年の原子力基本法にも、曲がりなりにも取り入れられた。

さて、時代は1970年代へ大幅に飛ぶ。伏見先生と学術会議との縁はその後も続き、副会長(1972~1977)、会長(1978~1983)を歴任された。その時代に振り返った原子力研究三原則と学術会議について見よう。

「三原則」の自主性は、すべての原子力先進国が原子兵器国であるから、その「悪い」教えを回避するためでもあるが、技術を本当に自分のものとしてマスターするために必要である。日本の原子力開発は明らかに自主的でない。原子力委員会は無定見で、その決定のどこにも自主的な政策樹立の跡が見えない。核物理を修めた者は基礎から応用に至るまでの研究開発の過程を重視するのに、原子力研究所が実用原子炉の直輸入では、要員の教育機関にすぎない全くの飾り物になってしまう。[6]

学術会議の30年を、10年毎の3期に分けて「科学のための科学」、「役に立つ科学」、そして「人

間のための科学」とある。その次の時代を「科学のための科学」への回帰と予想している。役に立つとか人間のためとかいっているうちに、科学者が科学者でなくなつて、ことばは悪いが、ただの世間の人になりさがつてしまうのではないかと思われ、その反省がやってくるからである。そうしたときのみ、「科学者社会」の考えが本当に成立するのではなかろうか。と結んでおられる。[7]

その4年後、1983年の参議院選挙出馬の動機を私なりに推測してみる。本稿4項目にある日本学術会議という機関の説明で下線を施した特徴：設立の精神は、時代とともにアチラ側からどんどん曲げられていく。つい最近の誰かの用語を拝借すれば、アチラ側は「脱却すべき戦後レジーム」の一つと思って来たに違いない。こちら側からいえば、戦前レジームを脱却して学問の自由を獲得し、積極的な発言から国の科学政策に反映させるチャンネルの筈だった。実際に積極的な提言活動をなさった伏見先生にとっては、学術会議設立から10年目の1959年に設置された科学技術会議[8]にはじまり、上に述べた「自主性」の実際などがあり、20世紀末の科学技術基本法に向かう逆流の時代。1977～1982年の会長時代には、学術会議に対する言いがかりに属することなどからいろいろと感じ取り、次のアクションを構想されておられたに違いない。直接の出馬動機としては、具体的な誘いを受けたことでもあろうが。先生流の旺盛な好奇心等も。

§ 5 第一部のまとめとして

ここまで執筆作業を通じて改めて感じたことを記します。順序に迷いますが、伏見先生の①鋭い感受性、②飽くなき好奇心、③深い洞察力、④素早い総合判断力、⑤強い責任感、⑥怠りを知らぬ行動力は以前から感じていたことではありますが、付録の伏見康治ギャラリーの冒頭に掲げる伏見少年が描き、大正4年刊行の教科書に掲載されたカエルの解剖図を拝見するにいたって、そこに反映している天賦の観察力と描写力が根底にあったことを痛感しました。それは何を対象としても発揮される総合力であり、①～⑥と組み合わさったとき、もの凄い威力を発揮することを痛感しました。興味の対象はいくらでも広がり、非線形的に世界が広がります。各個別能力もどんどん強力になって行つたはずです。研究対象が格別広いことも納得がいきます。加齢に伴う個別能力の低下はあったとしても、既に組織されて回路を構築した部分は別のレベルの能力となっているのだろうと推察いたします。天賦の才はなくとも、せめて何かワザを盗んで、少しでもあやかりたいと思います。

参考文献

- [1] 「紋様の科学」数学セミナー誌に30回連載。1967年5月号から1969年12月号まで単純計算では32回収容できるが、両端の内側を抜かすという対称性がある。つまり1967年6月号と1969年11月号は休みという対称性があるもよう。
- [2] 「紋様の科学」第11回。数学セミナー1968年4月号
- [3] 伏見康治、安野光雅、中村義作『美の幾何学：天のたぐらみ・人のたぐみ』中公新書 554、1979年102～107頁。
- [4] 『形の科学百科事典』形の科学会編（2004年、朝倉書店）
- [5] 伏見康治『時代の証言：原子科学者の昭和史』（同文書院、1989年）特に207～259頁。
PDFファイル <http://www.viva-ars.com/bunko/fushimi/hushimi-1.pdf>
- [6] 伏見康治「原子力平和利用三原則の四半世紀」朝日ジャーナル1977年5月20日号（著作集7、299～310頁所収）
- [7] 伏見康治「学術会議三〇年」科学朝日1979年1月号（著作第6、35～39頁所収）
- [8] 詳しく触れないが、伏見康治「学術会議と科学技術会議」科学1960年3月号巻頭言（著作集6、11～13頁所収）に伏見先生の見解が述べられている。

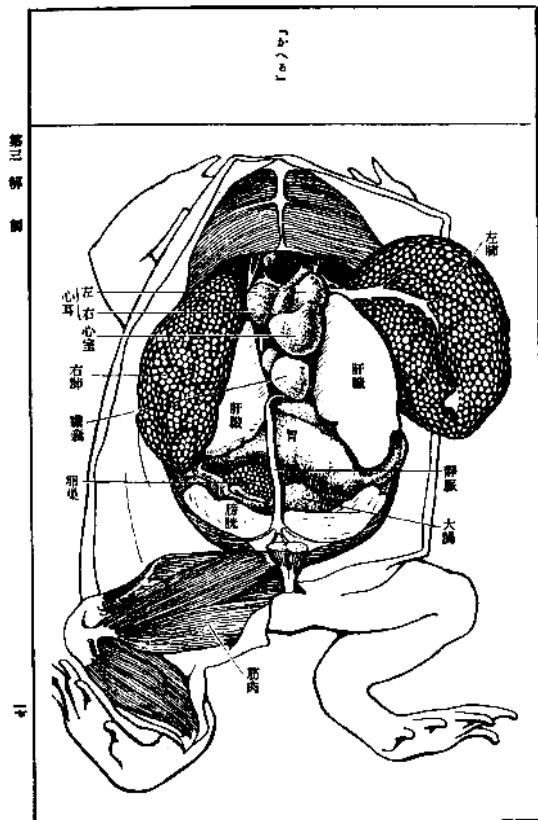
冒頭の著書一覧の 10 に相当する『波うつ電子（仮題）』について

「丸善」の予告によれば、専門的な知識を必要としない平易な文章で、日常的な題材を用いながら、現代物理学のエッセンスを、伏見先生独自の視点でまとめて解説されており、いま読んでも新鮮で、改めて得心の行く素晴らしい内容です。

『波うつ電子（仮題）』は次の 10 の話からなる。「飛び交う分子」「燃える分子」「原子建築」「震えるエーテル」「流れる電子」「波うつ電子」「光のつぶて」「光る原子」「原子模型」「原子アンテナ」。『驢馬電子』が「原子核物理学二十話」なら、『波うつ電子（仮題）』のほうは「原子物理学十話」に相当する。なお、「祝う会」出席者には購入に関する特典もあるようなので、詳細はわかりませんがご相談ください。

付録 伏見康治ギャラリー（付： 川崎敏和「カワサキローズ」）

冒頭に掲げた年譜の大正8年の項に、「絵心があって」とあった。教科書に掲載された作品や、FORMAに掲載された政治漫画などを次頁から陳列します。



中等高校の動物の教科書「競近動物学教科書」(谷津直秀著/東京開成館)に掲載された伏見少年の
ペンによるカエルの解剖図

『先学訪問 伏見康治編 ~21世紀のみなさんへ~ 09』(2007、社団法人 学士会)

聞き手：井口洋夫（物理化学者・日本学士院会員・東京大学名誉教授）

より

井口 先生は、絵が大変お上手ですが、子供の頃からの才能ですか。

伏見 天賦の才ですね。

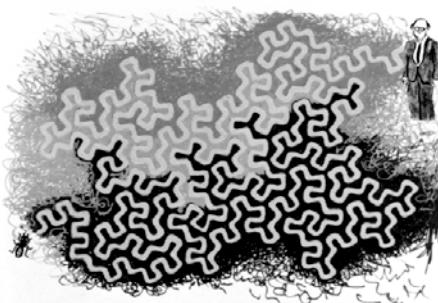
井口 尋常科時代には、先生が描かれたカエルの解剖図が、中等高校の動物の教科書に挿し絵として採用されたそうですね。

伏見 教科書の巻末に載せていただいたのですが、私自身は教科書を書かれた谷津先生と直接の関係はなく、博物の鈴木豊先生の推挙によるものです。

病気療養で一年休学し復学してから鈴木先生の部屋にはしおりに出入りして顕微鏡のプレパラート作りなど手伝っていました。また、やたら変な植物を摘んできては先生に学名などを聞いていました。（中略）私は標本にするよりも写生することに熱心でした。動物の解剖もずいぶんとやり、それも写生していました。教科書に掲載されたのは、そのうちの一枚です。



古希祝い文集の表紙（既発表15編）1979



迂余曲折の
一筋の道
伏見康治

伏見康治編著『創造性の文化と科学』
(共立出版 1989) の口絵

政治漫画 3 点

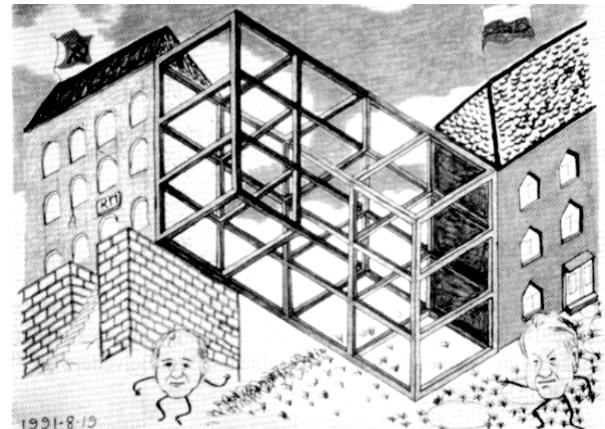
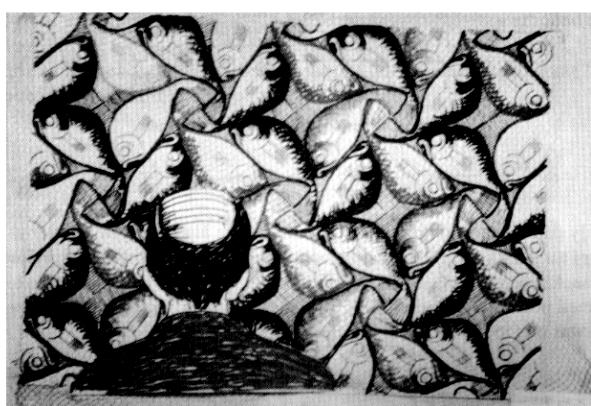
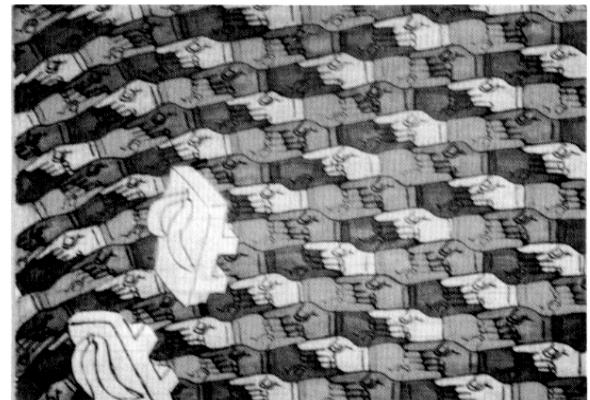
右) 指弾される田中角栄元首相

下左) 敷石しか見えないけれど、どこに行ったのかしら? 中曾根先生!

下右) 不合理な構造の鉄骨でなければつながらない資本主義 (エリツィン) と社会主義 (ゴルバチヨフ)

Kodi Husimi: "The World of Escher, as understood by Prof. K. Husimi"

FORMA 9, 157-169, (1994) [Special Issue: The World of Scientific Art: Eds. Y. Watanabe, R. Takagi, and T. Ogawa] より転載

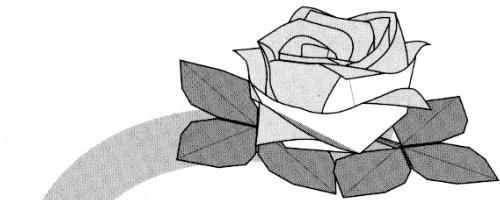


引き出物のカワサキローズ

川崎敏和 (阿南高専) の作品

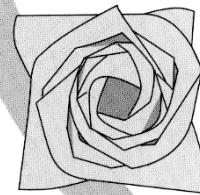
「バラと折り紙と数学と」 (森北出版、1998)

より



花の底のすき間にバラの葉 (116ページ)
の茎を差し込む

やっと 完成 お疲れさま



バラのつぼみ ⑯と同じ
ように中心をまとめる